

【実践記録】

瀬戸市公立保育園の保育実践「命の学習」の誕生について

金子 晃 之

Birth of “Learning for Life,” as Childcare Practice at Seto City Public Nursery School

Teruyuki KANEKO

はじめに

愛知県瀬戸市の公立保育園は、2022年度現在、10園となっている。その10園全てではないが、2011年から有志の保育士によって、子どもの心と体と性とを繋げる保育実践「命の学習」が始まり継続している。

本稿は、愛知県瀬戸市公立保育園での保育実践「命の学習」の誕生について、創始者である山内房子氏と大塚あつ子氏に対するインタビューを記録として残し、さらにそれを通して創始者が託した思い、実践の誕生と展開を支えたもの、実践の特性についての整理を行う。

そのために2020年に桜花学園大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」から承認を受け、同年2月28日にプレ・インタビューを実施し、同年11月26日に半構造化インタビューを行った。

1. インタビューを通じた実践の誕生と経緯、創始者の思い

「命の学習」の保育実践は、2011年の年明けの幡山南保育園にて、当時の園長である山内房子氏の下で始まった。その前史は、2009年に遡る。愛知県で小学校教員をされた大塚あつ子氏、岐阜県で中学校教員をされた渡辺武子氏他が、“人間と性”教育研究協議会の全国夏期セミナーで、「幼児期の性教育を始めませんか」という提案をしたことに遡る。この大塚氏の紹介から山内氏は、2011年1月9日に岐阜県中津川市立坂本幼稚園（現 坂本こども園）を訪問し、中津川市の「命の教育」の取り組みを参観した。

中津川市では2006年に「性教育準備委員会」が組織され、翌2007年度から「命の教育推進委員会」による「命の教育」が始められた。

○山内：12月に、大塚先生から中津川市の取り組みについてお話をいただいて、やはり、やる前に、どんなふうに授業をされているのかを見せていただきたくて、そのきっかけとして、

年明けの1月9日に中津川市にお願いして坂本幼稚園にお邪魔したわけです。

ここでは、卵で生まれてくるもの、赤ちゃんで生まれてくるものの仕分けをしたりとか、あとは本当にシシャモの卵を取り出して、実際に子どもたちが、その魚のにおいを嗅いだりとか、お腹のなかを見たりとか、そんなことをやっていました。

何よりも印象的だったのは、そういう体験を通して、子どもたちの目が輝いていたこと。「主体は子ども」であり、「命の学習をするよ」じゃなく、保育の中身が命に関わることにつながっていくという内容で進められていたのを覚えています。

それを見させていただいて、それまでやってきた実体験の大切さ、自然に触れ合うこと、食に関して子どもたちと共に楽しむことなどを、大塚先生の科学的な「いのちの学習」の内容とつながっていけたら、やっていることにより繋がって、その子どもたちにとって良いものになるなという思いで、取り組みを始めさせてもらったわけです。

山内氏が坂本幼稚園の実践から捉えたのは、学習の時間の学習ではなく、「保育の中身が命に関わることにつながっていく」ことの大切さを、坂本幼稚園の実践に見出したといえる。そして2010年度内に3回の実践が試行された。

○山内：年長児にとって、あと残り3か月でしたが、その3か月で3回の授業だったと思うんですが……。最初は、自分たちの体を知り、自分を描くことだったり、それから、命の始まり、それから、生まれてきてくれてありがとうの大きなポイント三つで始めました。

自分の体を知ることと、もう一人の自分を描いてみる。それから、命の始まり、生まれてきてくれてありがとうに向かっていき、それが基本なのかどうか分かりませんが、一番の基本のところを、子どもたちに知らせていくという思いで。そのときはやっぱり、それまでもでしたけど、幼児期には本当に自信のない子ども、それから、自分の思いをなかなか言えないとか、バーチャルの世界が子どもたちの周りに多く広がっていく現実の中で命について、子どもたちにどう伝えたらいいか分からないというところもあったので、やはり自己肯定感を大切に、自分も他の人も大切にできるような、というねらいで始まったと思っています。

山内氏にとっては、子どもたちの中にみられた自信のなさ、命の現実感が希薄であること等に対して、自己肯定感を高める新たな保育を実践することで対応しようと考えていた。

2011年4月になると山内氏は、幡山南保育園から南保育園へ異動となった。幡山南での3か月間での3回の試行については、幡山南保育園保育士の飯島しおじ氏と鈴木益子氏、愛知“人間と性”教育研究協議会の新崎道子氏の3名が2011年5月29日に愛知保育団体連絡協議会主催第17回「あいち保育と子育ての会」の講座：「日常保育活動に性教育の視点を！ ～これならできる！ からだっていいな、いのちってステキ～」の中で、報告を行った（司会は大塚あつ子氏）。

異動した南保育園での新園長としての当時の思いを、山内氏は次のように述べている。

○山内：転勤先の園でも、「命の学習」がやりたいという思いがあったので、まずその話を4月明けてから職員にさせてもらい、ちょうど、それこそ5月の29日ですね。幡山南の先生が、3か月実践したことを発表してくださる話になったので、ぜひ、これを聞いてほしいということで、そちらに、みんなで聞きに行くという形を取りました。

山内氏が「命の学習」を実践したいと考えた根底には、それ以前からの、命を自然から捉えて行く実践があった。

○金子：山内先生は、川遊びとか、畑のような自然を使った保育を、場所柄も反映されて展開されていたと。このとき、「命を自然からアプローチする」という方向でしたが、そこに今度、大塚先生の「命を心と体からアプローチする」という、この二つのスタイルが合体していくようなかたちでスタートされたということをお聞きしていますが、そのあたりのところからお話しいただいてよろしいですか。

○山内：私が園長になってから関わらせてもらってきた保育園が、幡山保育園・幡山南保育園・南保育園なんですけど、最初の幡山保育園のときに、自然は周りにあるんだけど、川はヘドロだらけで、畑や田んぼもほとんど耕していないような状況が周りであって……。でも、子どもたちは、その環境で実際に何をしているかという、外で遊ぶことが少なくなり、テレビとかビデオ、ゲームがすごく盛んに遊ばれる年になって、この『命の学習会 ～H26年度実践報告書～』でも書いているんですけど、リセットすれば繰り返生き返る仮想シーンが、子どもたちの頭に残っていて、現実とバーチャルの世界が混同している子どもたちが多くいたということ。

また、自然の遊びから学ぶもの、それから、子どもたちが考えて遊びを構築していくものがなかなかなく、上から「何々をしようよ」という話から、言われて動く子どもたちも多かったんですけど……。そのなかで、やっぱり自然のなかに子どもたちを置いたら、子どもたちが自発的に何をするかとか、それから、子どもたちの体、五感を通してワクワク、ドキドキする体験の楽しさを味わわせたくて、地域の人にお話に行き、「そういうことができるところはないでしょうか」と自治会長さんにお話し、農家さんを紹介していただいたということです。その農家さんに話をしたら、田んぼも畑も提供して下さり、「好きなことをやっていいよ」と言って下さり、本当に地域の方たちの協力のもとで、できた保育だと思うんです。でも、やっぱり、そういうことで子どもたちには、自分たちからの発見や、そういうなかでの命について考えるきっかけをつくりたい、子どもたちと共につくっていききたいなと思ったのが、自然体験の保育かなと思っていますけど。

○金子：実際に、どのようなことをされましたか。

○山内：田植えから始まって、稲刈りまでやったり、あと、田んぼの空いている時季にレンゲ畑をつくっていただいて、そこで遊ばせてもらったり、ヒマワリ畑にして、ヒマワリ迷路をつくったり……。自分たちの背丈まで伸びているなかで、子どもたちが、何を発見して、どんな

遊びが展開されるか、どんなことが考えられるか、仲間とのつながり等。あと、でこぼこしているなかでヒマワリ畑を楽しく走りまわり体の体幹を鍛えることも出来たりして、いろいろな狙いを持って、周りの川も畑も野菜も花もいろいろなことが地域の自然や資源を、利用させていただいて出来たことですね。

なので、地域の人がホオズキを一つ持ってきてくだされば、ホオズキ遊びをする。あとは、田んぼで収穫……、ずっと目の前に子どもたちが植えた畑が広がるので、それで収穫までいき、「じゃあ、これでどうしよう?」「パーティーをしよう!」そしておにぎりパーティーにしました。その後、もち米の藁で注連縄をつくり、お正月に飾るとか……。そういつて、一つ一つをつなげていながらやったので、毎年、違うもの、違う自然もありましたし、つながって同じお米づくりをさせてもらったというのもあります。菜種づくりのときは、保護者の協力もあって、業者さんに頼みながら、刈取り、種取り、その後、菜種油まで採り、それで子どもたちと一緒にドーナツをつくって食べて、食育につなげたとか、いろいろなことをやっていました。

○金子：そうですか。その期間は、だいたい何年間ぐらいだったんですか。

○山内：幡山南保育園のときは4年間、幡山保育園のときは2年間やっていました。南保育園に行ってなくなったわけではなく、そこの園でできる自然体も利用しながらですね。

○金子：そうすると、南保育園では、田畑とはちょっと切れちゃったという感じなんですね。

○山内：はい、まわりには田んぼはないので、今度は園の敷地内にある山で、安全に配慮しながら遊んだりしました。

○金子：山ですね。

○山内：安全策を施して、そこを自由に出入りできて、子どもたちが遊べるようなところをつくったりとか。畑はないんだけど、そこにピオトープみたいなふうにしてお米を育てて……。そうすると、自然に田んぼからオタマジャクシとか、いろいろな生物を持ってきてくださる保護者がいたりして、「あつ、こんなのがお米のところにはいるんだね」とか、毎回、毎回、展開はさまざまでしたが、カエルは田んぼにしかいないと思っていたのが山にもいましたし、そんな発見を、子どもたちと楽しみながら、保育士もそういう体験をしていない人も多いので、共に育っていましたね。

一方、大塚氏は当時、瀬戸市の性教育推進委員会に取り組んでいて、小学校での実践から保育の中の課題を捉えていた。

○大塚：まず、私がなぜ保育のほうに足を向けていったかということですが、もともと小学校の教員でした。その小学校の教員時代に、瀬戸市は「性教育推進委員会」というのがありまして、各学年で2時間ずつ性の授業を実施していました。私はその指導案をつくっていました。いろいろと実践していくなかで、小学校の1年生に入ってきたときから、自分の体に対して、すごいやらしいというイメージを持っていたり、自分に自信がなかったり、自己肯定感が低いというか、何か、こう自分自身を認める力が弱いなというのは思っていました。

そこで、いろいろと調べてみたら、幼児の教育に関する文献というか、そういうもののなかに「性」という視点がなかなか見つからなくて、「発達」というところとか、いろいろ見たんですが、「性」という視点がどうも抜けているんじゃないかと思いました。渡辺武子先生たちと話し合いながら気づいていったことでもあります。

「思春期からでは遅すぎるよね」というのが仲間たちとの共通認識でした。「じゃあ」ということで、幼児の性教育というか、幼児の「命の学習」に足を向けていったのがきっかけです。

実際に愛知保育団体連絡協議会に、性の分科会というのはありませんでした。そこで、渡辺武子先生と新崎道子さんと私の3人で、愛知保育団体連絡協議会の事務局に行って、保育のなかに、性の視点の必要性を話して是非入れてほしいということで分科会をつくっていただき、その分科会で発表したのが、さきほどの5月、幡山南保育園での実践です。

子どもたちの幼児期の自分の身体のイメージや自己肯定感の問題を、「性」という視点から捉えることの必要性が大塚氏の実践の出発点であった。その過程で実践は、どのように試行錯誤して展開されていったのか。

○大塚：丸ごとの自分を、「まあまあ、いい線」というか、「まあまあいい、捨てたもんじゃない」というか、そういう自分の心と体の肯定的な実体験が不足しているんじゃないかということ。それから、実際に、科学的で正しく豊かな体と心の学びが不足している。そんなことで、幼児教育のなかに、ぜひ「体と心の学び」を入れていきましょうということになっていったんですね。

具体的には、どういうことかという、まず子どもたちに「体っていいな」って感じてもらうことです。話はちょっとずれるんですけど、体の絵を描いて、「じゃあ、そこに部位を描き込んでいこうね」と言っても、鼻とか口とかは描けても、性器が描けない子が、やっぱり何割かいた。だから、性器は特別なものではなくて、性器も含めて全て自分の大事な体なんだよということを、まず幼児期の子にストンと落としかつたということです。「体っていいな」って。

私たちにも、みんな名前があるように、体にも名前があるんだよって。「ここは？」と言ったら、目、お鼻とか、口とか。じゃあ、どんなお仕事をしているかな？ ということ、まず目。目はモノを見るお仕事だねとか、口の仕事も、子どもたちに注意を引いてもらうために、ここにあったと思うんですけど、かっぱえびせんか何かを持って行って、目隠しして、「これ何だと思う？」と言って、「目で見えなくて分かんないね。じゃあ、お鼻に近づけて」って匂いを嗅いでみても分かんないね。「じゃあ、お口で調べてみる？」と言って、お口で食べて、「ああ、かっぱえびせんだ」とかというようにゲーム形式で進めながら、体には、みんなお仕事があるんだよねっていう。そして名前とお仕事を教えていく。それが、まず最初です。

そのときに、画用紙に自分で絵を描かせていきました。けれど、山内先生と相談して、それでは子どもの心に届かないねということで、模造紙の上に寝転がってもらって輪郭を描いて、

等身大の「もう一人の自分」を描いてもらう。「もう一人の自分」に、「じゃあ、目とか鼻とか、お口を描こうか」と言って描き込んでもらう。「じゃあ、今度は首から下も描こうか」といって、おっぱいを描いたり、性器を描いたり。

今でも覚えているのは、男の子は殆どがペニスだけ描くんですけど、ある男の子は睾丸まで描けて、「あっ、この子ってすごいな」っていうか、「自分の体をきちんと見ているんだな」と。それに比べて、女の子のほうは、ほとんど描けない状態でした。そんなこともありながら、実践を重ねていきました。

「自分の体ってすごいよね」、「みんな、お仕事を持っているんだよ」って。そして、「男の子と女の子、形は違うけど、お仕事は同じだね」っていうことも。

私は画用紙に自分を描いてみました。それでも裸の自分を見るのってすごく違和感というか、恥ずかしいという気持ちがあったんです。子どもたちは等身大の自分がそこに、もう一人の自分がある。そこでどうしたいっていうと、寒いときには寒いから服を着せたいとか、恥ずかしいという言葉が出てきます。「そうだよ。じゃあ、下着を着せようか」と言ってパンツをはかせる。「ここが一番大事だよ」っていうことで、自分の体は全部大事。パンツで隠れるところは特別大事なところだよ、と教えていきました。実際に「もう一人の自分」に投影して描いていくと、子どもたちは、「もう一人の自分」にすごく愛着がわく。不思議と顔も似ていました。

人間の体が性器を含めて生理学的な役割を持っていて、全て大切な自分であるという実感を育てて行く。その実感は、プライベートゾーンについての意識や「もう一人の自分」への親しみにつながっていく。

○大塚：みんな自画像を描いているみたい。何か不思議と似てくるんです、顔が……。よく似て、すごい愛着を持って対応している。そして、「体っていいな」って、「自分の体って素適なんだよね」っていうのを実体験してもらうというのを、まず最初にやりました。「パンツで隠れるところ」という子どもたちに理解しやすい言葉を使って説明しました。また、性被害を防ぐということもねらいとしてありました。

次に、「命の始まり」。命が生まれてくるということで、小さな受精卵が……。「みんなの命の最初って、どれぐらいの大きさだと思う？」と尋ねて、鶏の卵を参考に3択で選んでもらいました。そして針でケント紙に穴を開けて、実際の大きさを体感しました。「そんな小さいところから、お腹のなかで、こうやって大きくなっていて、こうやって生まれてきて、みんなってすごいね」って。そのときに、最初はやらなかったんですけど、2回目か3回目ぐらいからは、お母さん……。南保育園のときには、妊娠中のお母さんに参加してもらい、心音を聞く授業をやって……。それも失敗したね、最初ね。

○山内：聞こえなかったりして。ガサガサ、ガサガサっていう音だけが聞こえたりして……。

○大塚：ドップラーという器具を借りてからは、心音がトクトク、トクトク聞こえるようになりました。15分ぐらいかかっても、子どもたちはすごい集中して待っているんですよ。あ

それは不思議でしたね。「みんなは、こうやって大きくなって生まれてきたんだよ。みんなってすごい、大事な子なんだよ」っていうのを、本当に機会あるごとに話をしました。最後にお母さんやお父さんからお手紙をもらう。「生まれてきてくれてありがとう」「生んでくれて」じゃなくて「生まれてきてくれてありがとう」。主体は子どもだということ。

それも、今でも忘れないんですけど、幡山南保育園での実践で、ある男の子が、お母さんとお父さんの手紙を見てたので、私が「何て書いてあるの？」って聞いたら、「教えない」って断られました。「今日、僕、これは家に帰ったら、宝箱の中に入れておく」って。そういう会話もありましたね。

3番目が、タッチの話。さっきの性被害の話ですが、パンツで隠れるところは大事だよというようなどころから含めていて、やっぱり人とのタッチ、いいタッチと悪いタッチがあるよということで、「間違った悪いタッチは、『いや、やめて』って言っていていいよ」というようなことで、今につながっていくと思います。そういうところが最初にテーマにした内容ですね。

人間の受精卵の大きさのこと、妊娠中のお母さんに来てもらい心音を拾い子どもたちに聴かせること、プライベートゾーンの大切さを、タッチを含めて意識させるようにしていた。このようにベースが組み立てられていった。このベースは、南保育園の実践の中で模索されていき、2014年度には9回の内容として編成実施され報告書が発行された。また南保育園の指導案をベースにしなが、他の園でも実践が始まっていった。

実践は、子どもたちの状況に応じて変化する。南保育園の指導案は、他園で微修正されたり、同園でも年度毎に変化していった。

○金子：そのときに、前年度のものを、翌年そのまま使えなかったときもあると。そのあたりの事情というのは、どのようなことがありましたでしょうか。

○大塚：これは山内先生のほうが詳しいと思うんですけど、例えば、保護者の方たちからお手紙をもらって、みんなで、そのお手紙を読み合っしてシェアするという授業なんですけど、実際にお母さんが亡くなって、いらっじゃらない子どもとか、離婚して別れているとか、お祖父ちゃんお祖母ちゃんが育てている子とか、いろいろな家族。だんだん、そういうことが増えてきたので、やっぱり、そういう子どもの家族背景も考慮に入れながら、保護者とコミュニケーションを取って、保護者に理解をしてもらいながら、その都度、読む本を変えたりとか、絵本を変えたりとか、そこらへんはちょっと配慮します。これは山内先生が実際にやられていて、苦労されているところです。

○金子：山内先生は、そのあたりどうでしたか。

○山内：毎年、子どもさんの抱える背景が違ってくるので、まずそれが、この年はどうしているかなんですけど、基本の指導計画はあっての上で、ここの部分はどうか変化させようかとか、ここは今年はないかとか、この絵本じゃなくて、こっちを選ぼうかとか、具体的なことになる、目の前の子どもたちの現状を踏まえたことがすごく必要になってくる。あと、父

子家庭のお父さんの理解、お祖母ちゃん、お祖父ちゃん家庭もありますし、ご両親がいないという方たちには、お祖父ちゃん、お祖母ちゃんにもお話を個別にさせてもらって、こういうことで「子どもたちに話をしていきたいけど大丈夫だろうか」と相談をさせてもらい方向を決めていく。それが園長の役目でしたけど……。そこで「ああ、ぜひやってください」とか「いや、こういうことだけは……」とか、いろいろな話を聞いて、じゃあ、そこらへんは配慮させてもらいながらってというような、1対1のやりとりのなかで、「あっ、保育園はこういう視点がちょっと欠けていたな」とか、子どものこういう部分には、「もうちょっと配慮が必要だったな」とか、いろいろなことを思いながら、その年、その年で進めていったのが経緯ですね。

○大塚：そうですね。基本はあるんだけど、選択しながら……っていうふうな。

○山内：担任が、一応、それを見ながら指導案を書くんですけど、それを大塚先生に、もう一回、見てもらって、「あっ、ここはちょっと変えたほうがいいんじゃない？」ってというようなアドバイスをもらいながら進めていったんです。

ただ、子どもとタイアップする保育士も、前の年に経験していない人が行ったりするので、そこらへんが初めての出会いで、やっぱり不安だらけで、本当に、こういうことを話していいんだろうとか、こんなことを子どもに話して大丈夫だろうかというような不安はあるので、その辺が、そばにいて下さる助言者の大塚先生からのアドバイスがすごく大きな力になったと思います。

このように保育士は、保護者家庭の状況を理解すること、家庭からの意見や自分たちの迷いに対するアドバイザーからの意見とのやり取りの中で実践を進めていった。

そしてその成果は、子どもの側、保育者側の双方に現れていった。

○山内：自分の体を知ってということで、これは「命の学習」なので、お勉強なんですけど、その自分の体を知るのに、一つ一つ焦点を当てるじゃないですか、これは目だとか、耳だとか……。 「話をするお仕事をするとところは『口』」って子どもが言うんですけど、一つ一つ取り上げて、その働きも一緒に合わせ込むことで、やっぱり、子ども自身が、自分を見る視点が変わるような気がするんです。

自分の体の中でお仕事をしてくれる部位が鮮明に理解できて、例えば、歯を磨くときに鏡を見る時の目が違ってくる。それから、ウンチをするときのお仕事。「ああ、今、こういうふうになっているんだ」ってというのが、そういう行為をするときに、子ども自身が認識して、意識してしているんじゃないかと、私は、これをやりながら思うようになったんです。

子ども側の成果として、子どもたちが自分自身の身体に対する認識を深めていることが実感されていた。そして保育士側の成果は次のように捉えられていた。

○金子：2010年代のときに、立ち上げで、だんだん形になってくる数年間のなかで、この命

の学習をやってよかったなと思われたときのお話を、それぞれ両先生から伺えたらと思うんですけれども、山内先生、いかがですか。

○山内：そうですね。保育士自身が「命の学習」を学び、取り入れることで、日常の保育の中で、自然にそれを意識した保育となり、保育の幅が広がり、保育に対する視点とか、気持ちとか、世界観が広がるみたいなところは絶対ありまして、いろいろなことを意識して、「命の学習」のことを頭に描きながら保育の内容を下ろしていけるようになる、その保育士の姿の変化がまずあります。

子どもたちは、年長を中心にやるんですけれども、それが、今は下の学年にもずいぶん下りているように、「命の学習」をやることで、その場限りじゃなく、その後、子どもが、そのことを踏まえて育っていくという子どもの成長のなかにも、幅が広がっているという思いがあります。あまりたくさんの卒園生と話をしていないんですけど、学校に行ってから、自分が「命の学習」をしたときのプライベートゾーン。私は、最初の頃は「プライベートゾーン」という言葉を使って、今は幼児にすぐ理解できる「パンツで隠れるところ」という言葉に直しているんですけど、プライベートゾーンを「学校でも習ったよ」って、すごく自慢気に話してくれて、覚えていてくれた。幼児期の土台があって、さらに学校でも学習することで、本当に、「素直に子どもの心に入っている、幼児期のこの『命の学習』だな」と思ったことがあるので、一部の子しか話が聞けてないんだけど、そのへんの積み重ねが、兄弟姉妹にも浸透していき、子ども自身にも、大人になって育っていく過程においても、何かしら体のなかに残っていることは確かにあるなと思います。

○金子：そうしますと、山内先生、保育にとって「命の学習」というのは、もう一回、言うかどうかということですかね。保育にとって「命の学習」の意味というものは……。

○山内：自分の体を知ることだったり、命の始まりを知ったり、「生まれてきてくれてありがとう。あなたは大切な子だよ」みたいなのが視点に入っている「命の学習」は、本当に、その子そのものを丸ごと受け入れてあげられる糧になっているので、その子自身の、「大切だよ」って、これは子ども自身だけでなく保護者もですけど、「ありのままのあなたでいいよ」ってところが、「命の学習」に含まれていて、それを受け入れてくれる大人と、そう思って育っていく子どもの両方の相重なる育ちのなかで、その子ども自身が、自分に自信を持って歩いていってくれる糧になっているんじゃないかなって私は思います。

○金子：ありがとうございます。まさに、養護のねらいそのものですね。

○山内：それを何年か自分が保育のなかに取り入れてみて、分かってきたことです。最初は、もう必死になって、「あっ、こういうことだ。ああいうことだ」「あっ、そうか、そうか」って、いろいろな実践を見せていただき、学びながら進んできて、ふっと振り返ったときに、そんなふうに見えるので、本当に初めて取り組む先生にとっては、「大丈夫だろうか。こういうことをやっていいのだろうか」みたいな不安もいっぱいあるのかもしれないなと思いながら……はい。

○金子：なるほど。そうすると、先生が、この実践をやられたときは園長先生だったわけです

けれども、それくらいのキャリアのある保育士さん自身でも、やはり、この「命の学習」をやり始めたことで、ご自身の保育士としての成長というのでしょうか、視野の広がり、実践の広がり、あと、子どもをいかにいろいろな方向から見て、保護者とも本当にきちんと話をして一人一人を見ていくという、その深さみたいなことを、あらためて先生ご自身も勉強していったというか、そういうようなことと言ってもよろしいんですかね。

○山内：と思います。

「命の学習」とは、子どもが自分自身の存在を肯定していくことと同時に、保育者が子ども一人ひとりの存在を保育実践の中で受け止めて行けるものとして捉えられていた。また山内氏は、先輩保育士がビギナー保育士の内面や段階を考慮し、かつての迷いのある自分を投影しながら実践していた。

○金子：では、大塚先生はいかがでしょう。

○大塚：最初は、「こういうふうにして授業をやるんだよ」というようなことで、私が授業をやって、それを見て保育士さんの方たちにやってもらう。

実は、ちょっと話がずれるかもしれませんが、保育園からの依頼はありました、いろいろなところから……。「子どもたちに命の大切さを教えてください」とか、「性を教えてください」とか、そういう依頼はありました。最初は受けていたんですけど、私が行って1時間授業をしても、それっきり。それでは効率が悪いっていうのではないけれども、やっぱり子どもたちには入っていかない。子どもたちと、いつも日々接していて、ちゃんと心と心のコミュニケーションが取れている保育士さんが、こういう授業をすることが一番大事なんだということを思いました。

私が授業をすることは、途中からはやめました。瀬戸市に入っていたときには、私が授業をするのではなくて、日々、子どもと接している保育士さんに、その力を付けて、その授業を保育士さんにやってもらいたい。

私は授業をするのは仕事だった。でも、保育士さんは、授業が仕事ではないですよ。だから、最初、そこところがちょっと戸惑われた方もいらっしゃるかもしれないんですけど。あと、私がいつも話している、今は本当に、「山内先生、ああ、私が思っていることと同じ」と思ったんですけど、そういう、何だろう、その子を丸ごと、「あなたは、あなたでいいのよ」と丸ごと受け止める。そういうものを提案したことを、多くの保育士さんたちに共感していただけたというか、そういう場を与えてもらえて、保育士の研修会にも参加させてもらって、話を聞いてもらえたりとか、そういう場がたくさんあって……。理解してもらえる保育士さんたちが増えていったというのは、すごくありがたかったです。

○山内：スピードは、ゆっくりですけどね。

○大塚：うん。そういう場を、山内先生や他の先生たちが設定してくださって……。

○山内：それは大きかったですね。うん。これって保護者にも関係してきますものね。

○大塚：そう。

○山内：保護者を巻き込んでやることに意義があると思っていたので、大塚先生の講演会を抱き合わせにしたりして、思春期を見通した子育て……。とにかく、「ありのままの子どもでいいのよ」と。「安全基地は、お母さんとか、家庭だよ」みたいなところを話してもらうことで、保護者の考え方の変化も生まれていったと思いますけど、やっぱり理想の子どものつくり方が多かった保護者さんが、「あっ、この子はこの子のままでいいんだ」っていうふうに思ってくださいるのは、やっぱり先生の講演のおかげだと思うんです。

講師であった大塚氏は、一般的な講師の姿勢を変えて、保育士に力を付けてもらうことと、「命の学習」が子どもや保護者により一層入って行けるようにする脇役になるように姿勢を転換させた。「日々、子どもと接している保育士さんに、その力を付けて、その授業を保育士さんにやってもらいたい」という気持ちで「その子を『あなたは、あなたでいいのよ』って丸ごと受け止める、そういうものを提案したことを、多くの保育士さんたちに共感していただけた」ことを重要なこととして捉えていた。

ここには「命の学習」に関わった人たちの、実感を伴って命を受け止めるという保育のねらいを軸にした、保育士間での実践の模索、家族の状況の理解と家族からの理解、スーパーバイザーと保育士との協働が、専門職としての成長を支えていたといえる。他にも中津川市の保育士との実践交流も挙げられる。

○大塚：もう一つ、別な意味で「命の学習」を理解してもらえた方が増えていったということです。話をさせていただく場を、より多く提供していただいた。例えば、今でも覚えているのが保育士さんの研修。保育士さんたちが、いろいろな保育園から集まる研修の場に呼んでいただけた。そこでお話をさせていただいたということは、直接、南保育園とか幡山南保育園にはそのときは入っていたけれども、直接入っていない園とも、保育士さんとも知り合うことができたといい、そういうつながりもメリットというか、よかったと思います。

それから、そういう意味では、大きい働きをしたのは、中津川市との交流です。もともと始まったのは、私と渡辺武子先生の個人的なつながりだったんですが、渡辺先生は、中津川市の「命の教育」のなかにメンバーとして入ってらっしゃって、いろいろな保育園にアドバイスに入っていらっしゃった立場です。最初、山内先生がそこに行かれたのがきっかけなんですけれど、その後も定期的に中津川市から、「この園で、こういう『命の教育』をします」という年間計画表を送っていただいて、そこに瀬戸市の保育園の保育士さんたちが参加することができ、交流ができた。他県ですけど、近いですし、そういう他市との交流もすごく刺激になって、保育士さんたちが、「あっ、これなら私もやれる」というふうにして学んでいきました。それも私にとってはすごくよかったと思います。

中津川市の保育士さんが、こちらに出向くことは、何か時間的な都合でなかなかできなかったっていうことはおっしゃってましたけれど、南保育園には見に来られてました。そういう市

との交流があったってということは、「命の学習」が深まっていくことにもつながっていったんではないかと思っています。

瀬戸市の「命の学習」は、先行する中津川市の実践を参考にできたということがあった。実際に等身大の絵を描かせるということは、2011年当時、山内氏が中津川市立坂本幼稚園を見学した限りでは、確認されておらず、瀬戸市立南保育園での取り組みとして捉えられていた。こうした他の地域との交流が実践を支え、アレンジをも促していた。

そうしたアレンジについては次のように捉えられている。それは指導案である。現在は南保育園で使った指導案が他園の状況を加味してアレンジされているが、園独自の指導案が、可能であればという意味での今後の課題の一つとも意識されている。

○金子：今後、「命の学習」の課題として、園独自の指導案をつくっていった方がよいと、以前に両先生が言われていたんですけども、そのあたりのこととか、それから、次の世代の方々に、どのようなことを託していきたいとか。これはもう個人的な思いで結構ですけども……。

ですから、独自の指導案をつくるのかっていう、今後の「命の学習」の、これから、さらにやっていく課題みたいなことを、両先生としては、どのようにお感じになっているかっていうあたりをお聞かせいただければと思います。では、山内先生からよろしいですか。

○山内：基本の指導案は持っていて、その年々で変化させるんですが、その園が積み上げてきた「命の学習」の指導案は、それぞれが持っていていいかなと思います。

あと、他の園で刺激を受けて、「あっ、これは子どもたちに、ぜひ下ろしたい」とか、「こういうことが、うちの園の特色だから、この部分を取り入れた命の学習にしていきたい」とか、そういうことは園独自で、やれることを考えて……。ねらいは同じであっても、それを活動に下ろすときは違っていいと思うんです。なので、最初のねらいは、初めから意味合いは変わっていないです。一つ目の「かけがえのないたった一つの命を大切にする」としたねらいは、初めは「命の大切さを知る」でした。二つ目の「自分自身を認め、他者も大切にできるようにする」としたねらいは、初めは「子どもたちの自己肯定感を育む」でした。それぞれを、より分かりやすい表現へと変化させた経緯があります。下ろしていくテーマの内容は、それぞれの園が、それぞれの環境を踏まえたり、子どもたちの姿だったり、保護者の様子を見ながら変化させていくことで成り立っていけばいいなというふうに思います。

○金子：なるほど。そうすると、例えば、15回の構成、それぞれのときの活動なども、何か新しいものが入ってきたりとか、別のものに、この年は変わったりとか、あるいは、ここの園独自の、例えば、15回中、7回、8回、9回あたりがちょっと他の園と違う活動になっているとか、そういうことが、ぜひあっていいのではないかというようなことでよろしいですか。

○山内：はい。そう思いますね。やっぱり、いろいろな面から子どもたちの「命の学習」のね

らいを、そこの職員で構築していけばいいのかなと思います。やっぱり、「命を大切にするんだよ」という言葉より、「自分は大げなんだ」という思いを子どもたちに持ってもらおうことがねらいかなというふうに思います。

○金子：では、大塚先生、いかがでしょうか。

○大塚：15時間、南保育園は15時間か、何時間かでやってるんですけども、幡山東保育園も、結構、私は丁寧に入って、あそこも何時間かあります。ところが、途中からやられている園は、「自分の体を知ろう」、それから、「もう1人の自分をつくろう」とか、あと「いいタッチ、間違った悪いタッチ」、これを三つでやるところとか、それに「生まれてきてくれてありがとう」というような四つの授業をやっているところとかもあります。

初めに取り組むのは、この南保育園でつくった指導案をそのまま自分の園で実践してみてもいいと思うんです。

これは教員もそうですけれども、新しい指導案をつくるって、すごく大変な作業で、独自の指導案っていうのは、私も望みなんですけれど、難しいなっていうのは思っています。下地があるから、それを頂いて、そこに自分の何かをプラスして、園の独自性をプラスしてやっていくぐらいだったら始められるかなって……。

保育士さんたちは皆さん、お忙しいので、これの新しいものを、カリキュラムをつくってやっていくっていうのはすごく大変なことで、労力が要るっていうのは感じています。

でも、それでも私の気持ちとしては、「先生、見てください」として指導に来たときに、これは指導案のあの部分を使ってるなとかっていうのはもう分かるんですけど、「あっ、これって新しいアプローチだな」というようなのが少ない。でも、新しいことをつくっていくのって、余程そこに、山内先生のように、そこに入って研究していかないとなかなか難しい。教員でもそうですよね。授業研究とか何かでも、やっぱり参考になるのがあって、そこからつくっていくふうで、全くゼロからつくっていくのは、難しいことで、時間もかかること。

希望としては、少しでも子どもたちとの毎日の対応から自分で考えた何か生まれてくるといいなと思っています。

○山内：例えばですね、この冊子のなかの項目で、「ウサギの心音を聞こう。ハッピー君の心音」は、毎年、プチZOO（株式会社なかよし生き物倶楽部）さんっていう動物園が必ず1回来てくれるという下に、「心音を聞かせてあげるからね、ウサギの」というのが項目に、移動（展示）動物園に入ってるんですけど、それをあえて自分ところの園が飼っていたハッピー君に変えてもらった、交渉して……。

それは、やっぱり身近なウサギさんが、より身近に自分たちの命として考えられるように……ってやっていったおかげで、この子が亡くなっちゃったときに、子どもたちが一緒にお葬式をしてくれたのも、一つの項目に入れた年があるんですけど。亡くなった、命がなくなるということもあわせて、中津川市だと前田敬生先生っていう動物病院の先生が、子どもたちに話を下ろしてらっしゃることなんですけど、身近な園でできたこと、園でやれること、そのお葬式を、本当に、みんなできてあげて、それで「じゃあ、今から焼き場に園長先生ともう1人の先

生が連れていきます。みんな、一緒に遊んでくれてありがとね」って言うってお葬式をしたときに、本当に子どもたちの顔が違っていた……ってというような身近な事象でいいんです。それを、いかに保育士が取り入れられるかっていうことが……。

○大塚：力量にかかってくるんです。

○山内：「命の学習」っていうものを、保育士が自分の体に取り入れていることで、それができる一つの方法かなとも思います。

○金子：子どもたちの日常の周りの出来事を通して、子どもたちが日常的に命っていうものをどう感じていけるのか。そこの設定を保育士さんのほうが、どれだけしてあげられるかっていうところが、やっぱり、この実践の大切なところであり、また醍醐味ではないかというような意味と解しました。素晴らしいお話ですね。

山内氏は、「『命の学習』っていうものを、保育士が自分の体に取り入れていること」と表現している。このことは、子どもたちの日常の生活の中に命のことを実感できる機会を、保育士がどれだけ取り入れて設定できるかが大切であるという解釈である。

○金子：では、今度、別の質問をさせていただきます。私がすごいと思っているところは、中津川市のほうだと行政として、市の教育委員会としての取り組みということで、市全体でやられていて、予算もついているということですが、瀬戸市の場合、そこはもう各自の、各園の園長をはじめとする判断とか、あるいは、やりたいと思う保育士さんの縦横のつながりで、こういう実践をやり始めていて、別の言い方をすると、自主的に選んで決めて行くことが大切にされている。これが少しずつ広がって行って、やりたいと思う次の人たちが現れてくる。そこが、私は一番、瀬戸市のすごいところではないかと、また素晴らしいところではないかと思ってるんですね。

そこに私は惹かれて、今日もインタビューをさせていただいていると思っていまして。そのあたりって、保育士さんのなかでは、どんなふうに捉えられてるんですかね。「ああ、私もやりたい」って思うような保育士さんたちの気持ちというのは、どういうところにあるんですかね。山内先生、いかがですか、そのあたりは……。

○山内：そうですね。市の保育課主催の研修が複数あり、その他は自分が学びたい研修に自主的に参加することで、自分自身の学びを高めてきたという経緯があります。やはり、子どもたちにとって、どんな保育がよりよい保育なのか、子ども自身の成長発達を考える視点というのが根底にあるような気がします。

○金子：分かりました。子どもたちの成長発達が根底にあるということですけど、山内先生が保育士になろうと思って勉強されて、この世界に入られて、保育士として仕事をされている、その道のりのなかで、何が先生を「やっぱり、子どもの発達が大事です」って、「そこを大事にします」っていうのを、そういう山内先生というのは、いつ頃からどんなふうにつくられてきたんですかね。

○山内：ええ？ どんなふうにつくられてきたんでしょうね。でも、自分……。だから、そうですね。「命の学習」では、「あなたのそのままがいいのよ」「あなたのそこがステキ」とか、それを保育士の立場で、保育士として、そういつて言ってもらって認めてもらってきたことが、「あっ、これでいいんだ」。この後に、ちよろちよろっと指導が入るかもしれないけれども、でも、丸ごと「あなたが今、頑張ってる、やってることは本当にステキなことよ」という思いで、受け止めてくださった先輩たちがいてくださったことで、自分の力になってきたかなと。今までの自分の世界が、とてもありがたい道筋だったのだと思います。

○金子：はい、分かりました。そういう意味では、やっぱり、何かリレーといいますかね、先輩たちの、瀬戸市の保育士さんの心意気みたいなものが、山内先生に伝わり、それがまた実践を通して、ある意味、後輩たちに、いろいろなかたちで伝わっていったらと言っても過言ではないというふうにお聞きしました。

○山内：そうですね。子どもたちに、いけないことの指摘じゃなく、いいところの視点で褒めていく。それが保育士の世界でもそうじゃないかな？ みたいなところが、自分は大事にしていきたいところかなと思っています。

専門職としてのエンパワメントの一つは、自主研修で培われた、研修に対する自己選択という主体性といえる。自分自身の実践のため、子どもの発達のためということが明確であること。公立の保育職にそのようなものが育っていったということ。

もう一つは、人の存在を、自分自身も相手もそれを尊重するという保育の重要な目的を、子どもに対してだけではなく、保育士間でも尊重してきたこと。これが山内氏という存在の中や、瀬戸市内の保育士の先輩後輩の中で引き継がれてきたという実感がある。

○金子：では、大塚先生はいかがでしょうか。これまで、瀬戸市の保育士さんとずっと関わられてきてまして、やっぱり、新人の若手保育士さんとかが、1人、2人と、この実践のなかに入ってきてくれたわけですね。そういう方々が、また成長するのも、先生は見守られてきたし、また成長を後押しするようなサポートも、先生なりにずっと継続してやられてくれたわけですが、そういう先生のお立場から見て、瀬戸市の保育士さんってどういう人たちなのかとか、あるいは瀬戸市の保育士さんのなかで、「命の学習」を自分でやりたいって思う人たちは、どういうふうに先生のなかでは映っていらっしゃいますか。

○大塚：「命の学習」を理解していただいた先生たちが、少しずつ他の園に移っていかれて、ゆっくり広まっていきました。一斉に瀬戸市で「こういうことをしましょう」という、そういう方向ではないんですね。それが私はよかったなと思っています。

もう時間は、2009年から2022年ってなると、もう10年以上経っているわけですけど……。でも、少しずつ実践して下さっている園が増えてきている。増えてきているということは、その途中で学んだことが、「あっ、これは今の目の前にいる子どもたちに必要なことなんだ」というか、「必要な学びなんだ」ということを理解していただいて、そして、またそこで少し

ずつやっていくとか……。そういう動きじゃないかなって言うふうに思ってた……。それは一斉にやるものとは違うけれど、私は着実に歩いていく、そういう歩みではないかなって言うふうに勝手に判断しています。

○金子：なるほど。

○大塚：もう一つは、瀬戸市の保育士さんたちは意欲的です。先ほどの研修の話もありましたけれど、教員も、決められた研修以外にも、それぞれ自分の意志で研修に行っていました。自分もそういうふうでやってきましたし、それこそ性教協なんかは、ほとんど自費で全国各地に行つて、夏のセミナーに行つて学んできたり……。

でも、自主研修で、あれだけたくさん保育士さんが集まるっていうのは、すごいびっくりして、「あっ、これは自主研修なのか」って驚きました。たくさん保育士さんたちが集まられて、そこで話をさせていただいたんです。そういう意味では、瀬戸市の保育士さんたちっていうのは非常に意欲的じゃないかなと、私は感じます。

ここで大塚氏がいう「その途中で学んだことが、『あっ、これは今の目の前にいる子どもたちに必要なことなんだ』っていうか、『必要な学びなんだ』ということを理解していただいて、そして、またそこで少しずつやっていく」こととは、保育の実践者として、専門職として、必要性を感じて実践を行うこと。それが必須ではなく、任意に自主的に選択し学び実践するという形で広まったことを意味している。

また実践は、小学校との繋がりによっても支えられていた。

○山内：……。あと学校とのつながりもできて。これは大塚先生のおかげなんですけど、学校の性教育プロジェクトチームですかね。

○大塚：はい。性教育推進委員会。

○山内：性教育推進委員会。そこに保育園も、1年に2回だけ、学校の性教育をやっている授業を見させてもらう。で、学校の先生も保育園に見に来てくださる。たくさんじゃないですけど、人数的には、授業があるのかな……。なんですけど、そういう交流ができ始めたときに、コロナだったので、その後が今、どうなって……。もう今、駄目になっちゃったかもしれないですが、それができ始めたんですよ。

○金子：なるほど。

○大塚：1年、2年はあったね。

○山内：連続的な子どもたちの発達を保障していくという『保育所保育指針』のねらいからいくと、学校とつながっていったことが第一歩で、回数は多くなくても、自分たちも入り込むことができるようになったという思いがとてもうれしかったんです。それは大塚先生のおかげなんです。本当に、学校の先生につないでいただきましたね、先生。

○大塚：そうですね、はい。

○金子：先生は、瀬戸市の性教育推進委員会とはどういうつながりでしたか。

○大塚：それはメンバーだったんです。

○金子：そうなんです、分かりました。じゃあ、後輩たちがいて、推進委員会をやられているというような、そういう感じだったのですかね。

○大塚：そうですね、はい。そこに校長、教頭、教務の先生、養護の先生、担任を持っている先生たちがメンバーだったんです。でも、もう何年も経つので、ほとんどもう分からなくなっていると思うんですけど……。たまたま推進委員の担当の校長だった先生と以前一緒にやっていたので、山内先生を紹介して、それでそういう交流ができたという。よかったんですけど、2年ぐらいやって終わりになっているかもしれないですね。コロナになっちゃいましたね。

○山内：そうなんです。そこは、ちょっとわからないのですが……。

2018年頃、保育園と小学校との交流が始まっていた。コロナ前の時期に、市の性教育推進委員会の存在が、公立小学校と市立保育園とを性教育の点でも保幼小連携という点でも繋げていたわけであるが、そこでも実践を作ってきた両氏の専門職としての繋がりが、小学校と保育園とを繋ぐ一つの役割となっていたといえる。

まとめ

以上が創始者へのインタビューであるが、創始者両氏の活動の特性を整理すると、以下のようになる。

①「命の学習」そのものを実践するというよりも、日常の保育実践の中で「命」を見つめようとする思いで始まったこと。

②結果的に実践は公立保育園共通の取り組みではなく任意に自主的に行われる形態となったこと。

③子どもたちが「命」について日常の中で理解し実感できるように、保育士が自分自身の実践の中に「命の学習」の本質部分を理解して取り込むこと。別の言い方をすると、子どもたちの日常生活の中に「命」について考え実感できる保育を、学習以外のところでも設定していくことを実践の深まりや保育士の成長と捉えていたこと。

④保育士が子どもを受け止めるように、保育士もまた仲間の保育士を受け止めて行く保育観を、それまでの保育士間の関係の中で実感していたこと。

⑤瀬戸市と中津川市の保育士間の交流、保育士とスーパーバイザーとの連携、保育園と小学校との交流が実践を支えていたこと。



写真1 家族から子どもへの手紙 中央が山内房子氏



写真2 へその緒について 左が大塚あつ子氏

II. 保育課程と構造

実践は、他園にも広まりながら、山内氏が園長であった南保育園において、2011年からの4年間の取り組みの結果として、『命の学習会 ～H26年度 実践報告書～』が刊行され、年間の詳細が記録された。

「命の学習」は、1. 「命の学習」年間計画（年少児から年長児）という3年間の系統的な「活動」と「学習」を基礎にして、最後の年に特別に設定される、2. 「命の学習会」（年長児）というものの中で、「活動」と「学習」の振り返りを行い、さらに新しい知見や体験を扱い、まとめの展開に到る構造になっていた。

まず、1. 「命の学習」年間計画（年少児から年長児）については、(1)「子どもの活動（食と自然）」、(2)「命の学習（体の発達）」、(3)「命の学習（人間関係）」から成っていた。

1. 「命の学習」年間計画（年少児から年長児）

(1) 「子どもの活動（食と自然）」

① 4月の花遊びが6月には花種取りとなり9月の種まきとなる。その種を次年度の命の始まりに持ってくる。

② 5月の田植えは8月にかかし取り付けとなり9月に稲刈り、11月におにぎりパーティ、12月に餅つきとしめ縄作りとなる。

③ 同じく5月にヨモギ摘みはよもぎ餅とよもぎ蒸しパン作り、園庭に夏野菜を植え7月に夏野菜収穫パーティとなり、9月には冬野菜種まきで1月に冬野菜収穫パーティとなる。

④ 6月のサツマイモの苗さしは11月にサツマイモ掘りと焼きイモになる。

⑤ 3月にはおこしものづくりとなる。

⑥ 4月にあおむし取り、かぶと虫の幼虫取りから始まり、小動物等を捕獲して飼育を行う。

⑦ うさぎの飼育を行う。

これは四季の中で食と自然にかかわる保育活動として設定されたものである。この過程で保育士も、野菜の種類と旬を知り、子どもたちに成長の様子を意識させることや、畑、田んぼ、花壇を耕やすこと、肥料やり、畝作りを行い、昆虫を含めた小動物の成長について学習することが要請される。

(2) 「命の学習（体の発達）」

これは、年間が4～5月、6～8月、9～12月、1～3月の期間で計画されており、以下の鍵括弧の各テーマの全て、1～3冊の絵本を用いながらの学習となっていた。

3歳児は、「一つ大きくなった事を知る」「動植物に触れる」「自分が男か女かわかる」「気持ちのいい感触を知る」「手洗い、衣服の着脱、用便などを自分でする」「戸外で十分体を動かして遊ぶ」「排せつの後始末を自分でする」「大きくなる喜びを持つ」。

4歳児は、「自他の違いに気づく」「動植物の命を知る」「体の部位の名前を知る」「命の大切を知る」「快不快の気持ちができる」「自分の体のイメージを持つ」「男女の体の違いを知る」。

5歳児は、「自他の違いを認める」「動植物を育てる」「自分の体に関心を持つ」「身近な動植物を育てることで命の尊さに気づく」「身体の主な部分の働きを知る」「プライベートゾーンを知る」「命の始まりを知る」。

(3) 「命の学習（人間関係）」

これは期間、教材とも(2)と同様である。

3歳児は、「保育士に親しみを持つ」「友だちの名前を覚え親しみを持つ」「ふれあいの心地

よさを知る」「保育士や友達と触れ合って遊ぶ楽しさを知る」「友だちとの触れ合いを深め関わって遊ぶ」。

4歳児は、「保育士と共感して遊ぶ」「友だちの誕生日を祝う」「自分の気持ちを表現できる」「相手の気持ちに気づく」「友だちに思いを伝える」「友だちへの思いやりを深め一緒に遊んだり楽しんだりする」。

5歳児は、「保育士に自分の思いを話す」「誕生日を喜んでくれる人がいることを知る」「友だちに自分から触れ合って遊ぶ」「障害のことを知る」「友だちと協力して遊ぶ」「異年齢の友だちとかかわりを深めいたわりの気持ちを持つ」「みんなちがってみんないい」「自分が大切な一人という事を知る」「目標に向かって友だちと協力してやり遂げる」。

こうした3年間の保育の中の「活動」と「学習」を基礎にしながら、その振り返りを含みつつ、まとめの展開に到るのが、2.「命の学習会」の年間計画（年長児）であった。

2. 「命の学習会」の年間計画（年長児）

「命の学習会」は、全ての会において保護者の参観が開かれており、「年間を通して子どもたちと向き合う短時間の常時活動（例：いまどんなきもち）や親子で活動するワーク型・イベント型の活動（例：家族からのふうせんラブレター、赤ちゃん人形作り）を年間計画の中に取り入れていった」ことを特徴としている。

6月～3月「いま、どんなきもち？」（年長活動の時に、自分自身のいろいろな気持ちや感情を言葉で表現する）。

7月「自分の体を知る」（体の名前と働き、プライベートゾーン）、「年長ラブレター」（保護者が子どもへ素敵なところを記載する）、「自分を大切にできる子を育てよう “命”」（保護者向け講座）、「自分を大切にできる子を育てよう “性を考える”」（保護者向け講座）。

8月「自分の体を知る みんなちがって、みんないい」（もう一人の自分を描く。いろいろな部位も描く。障害についても支援物を写真や実物等で知らせる）、「自分の体を知る もう一人の自分」（見たり、見せてはいけない部分に下着をつける。ロールプレイ）、「人形作り」（生まれた時の体重の人形を保護者が来園して作る）。

10月「みんな違ってみんないい」（『ますだくんのランドセル』を読んで髪型、被服を考える）、「うさぎの心音を聞こう」（ハッピーくんの心音）。

11月「大切な家族に向けてのラブレター」

12月「おへその働きを知る」（おへそは何のためにあるの？ 自分の周りの動物などにおへそがあるか調べる）、「おへその働きを知る」（家で調べてきたことを話す。おへそのある生き物とそうでない生き物に分ける。あるもの、ないもののわけは？）、「いのちのはじまり」（自分の命の始まりが分かり、今ここに自分がいることがすごいと感じることができる）。

3月「生まれてきてくれてありがとう」（かけがえのない命のあなたへ）。

3. 保育課程の構造

以上のように展開された実践を保育課程（保育カリキュラム）として整理すると、南保育園では、日常の生活があり、さらに3年間を通した「課業的活動（保育士が系統的学習として指導するもの）」として、命を主に健康と環境から捉える(1)「子どもの活動（食と自然）」、そして健康から捉える(2)「命の学習（体の発達）」、さらに人間関係から捉える(3)「命の学習（人間関係）」という3つから成る「命の学習年間計画」が設定された。

(2)(3)は系統的な命の学習として設定され、(1)は四季の流れに沿って系統化した体験活動として設定され、その活動体験の中での生き物の飼育や農作物の成長を見ながら山で遊ぶなどは、課業的活動が子どもたちの日常の自由場面における遊びへと転化していく側面も持っていた。

そうした3年間の活動体験や学習を土台として、年長児の1年間には同時並行的に2、「命の学習会」が設定された。それは、「命の学習」のねらいとしての「かけがえのないたった一つの命を大切にすることや「自分自身を認め、他者も大切にできるようにすること」を集大成していくために、さらに特別な「課業的活動」として設定されたものだった。これが特性である。

そしてこのような「命の学習」を計画化した保育課程は、それをそのまま踏襲し実践すればそれで済むというものではなく、子どもが「課業的活動」で体験し学ぶことを日常の生活の場面でさらに実感していけるようになること、山内氏の言葉でいう「保育の中身が命に関わることにつながっていく」には、「命の学習」と子どもたちの日常の生活の場面場面とをさらに繋げて行ける保育士側の設定が必要となる。ここに、この保育実践の深さと可能性があるといえる。

先駆者、開拓者というのは、後から辿ると途方もない冒険である。そこには実践者の深く熱い思いと道のりがある。そうしたものは、記録として残され、後進への道標の一つにならなければならない。

瀬戸市公立保育園で自主的に取り組まれた実践は、体や性の理解に限定されたものではなく、体と性と心を繋げて命を理解し、自己と他者との深い肯定と人間関係作りを目指すものである。日本の保育現場の中ではあまり重視されてこなかったこの課題に対して、専門職として自主的に取り組み続けていることには、とても大きな意義があるといえる。

またこの実践には、大切であり難しい面もある。その一つとして、誰からの、どのようなタッチであれば良いのか悪いのかといった、プライベートゾーンへのタッチの境界を子どもに教えることは、タッチの快・不快が相手や状況によっても変化する一律に割り切れない側面を持つことから、保育士が、子どもの日常の人間関係や言葉を含めて、常に考えていかなければならない問題であるからである。そうした大切で難しい面も含んでいるからこそ、今後の展開に注目したい。

謝辞

筆者は2019年当時、瀬戸市の公立保育園をたびたび訪問させていただき、各園の「命の学習」を参観させていただいた。そこでお会いした全ての保育士さんにお礼を述べたい。とりわけ、山内房子氏、大塚あつ子氏、当時の瀬戸市保育課主幹であった小島早苗氏、南保育園園長であった中島史恵氏、2022年現在の瀬戸市保育課主幹の白木美香氏、そして岐阜の渡辺武子氏に心からお礼を申し上げたい。

参考文献

- 飯島しおじ (2011) 「自己肯定感を育て、いのちの大切さを知る～『命の学習会』を通して、自己肯定感を育てる～」
- 飯島しおじ・新崎道子 (2011) 「日常保育活動に性教育の視点を！ ～これならできる！ からだっ
ていいな、いのちってステキ～」 2011年5月29日 愛知保育団体連絡協議会主催 第17回あ
いち保育と子育ての会 講座7 配布資料
- 山内房子・大塚あつ子・秋山理咲子・大森杏菜・瀬戸市立南保育園 (2014) 『命の学習会～H26年度
実践報告書～』
- 中津川市命の教育推進委員会事務局 (2019) 「平成31年度『命の教育』の取り組みについて」
- 松原富久美・戸田裕子 (2019) 「幼児の『いのちの学習』」 愛知“人間と性”教育研究協議会2019
年度総会・実践発表会
- 大塚あつ子・渡辺武子他 (2022) 「第2回『いのちの学習』の勉強会」 配布資料2022年6月26日。
同報告書2022年6月29日。「第3回『いのちの学習』の勉強会」 配布資料2022年11月12日。
同報告書2022年11月26日。

(受理日 2023年1月5日)